

# 地域とつながる路

## — ESD 対馬調査日誌から —

上田 信

ESD、持続可能な発展のための教育が目指す人間像とは、何だろうか。ESD研究所の一員として、阿部治氏と調査に出かけるなかで、私のなかでそうした人間像のイメージが具体的な形を持ち始めている。

阿部氏との調査は、本研究所の前身ESD研究センター時代の2010年3月に実施された奄美調査と、本研究所が進めた地域創生拠点形成事業として行った2020年3月の対馬調査がある。特に本巻に寄稿されている前田剛氏の案内でめぐった対馬での経験は、私にとって一つの転機となった。

新型コロナウイルスの影響で、客の減少により、午前の福岡⇒対馬便が欠航、午後便で島に渡る。出迎えてくれた前田氏の案内で、神宮（しんぐ）正芳氏の農園を訪ねる。農園では赤牛の牧畜、米作り、アスパラガスと多角的に経営している。

牛や鶏の糞尿を堆肥として農業を行い、牛は放牧する。「外国から輸入された飼料は不安。有機農業の信頼性を保つために、飼料を島内でまかないたい」と、国際的な飼料市場から自立しようとする取り組みを熱く語ってくれた。丸太



をくり抜いて造られたニホンミツバチの巣箱「蜜胴」を山中に置き、10月に蜜を集めるという。こうした神宮氏の農園には、体験のために訪れる人が多いという。夕暮れが迫り、私たちがいとまを告げるころ、ウシたちが自分で戻ってくるところに行き会った。

最終日には、対馬グリーン・ブルー・ツーリズム協会の川口幹子氏と、昼食時に対馬名物のアナゴ料理店で合流することができた。川口氏は地域創生に取り組むソーシャルベンチャー企業MITを立ち上げて、対馬学の基を創った。MITは「みつける」「活かす」「つなぐ」の頭文字を連ねたものだという。大学生を集めて合宿型のセミナーを開催する中で、学生を農家に泊めたところ、一番感動していることがわかり、民泊に軸を置くことになったという。現在は、民泊を利用したヤマネコ探索ツアーなどの企画も実施。夜にヤマネコを見に行くだけでなく、生息環境を作っている農家の取り組みなども案内している。保護ではなく、

村の生業との共生をメッセージに据えることで、現在の活動へと発展したのである。業務が多方面に及ぶMITから、観光・教育部分を切り離して「一般社団法人 対馬里山繋ぎ塾」を新たに設立。ツーリズム協会の事務局を運営しながら、対馬での暮らしや体験を通じて自然の恵みを巧みに活用する技術と知恵を身に着けた人材の育成にも取り組んでいる。今は、島留学の里親にも。ずっしりとしたアナゴを食事ながら伺った話は、私にとって刺激的であった。

いま日本の教育は、人材育成を目的とすることが多い。近年は「人」は「材料」ではないと「人財」とも表記されるが、社会の機能の一部を担う人間を育てるということでは、大差はない。人材の対局に位置づけられる総合的な力を持つ人物に、対馬では多く出会うことができた。その一人が、対馬という大地に足を下ろし、農業・畜産・養蜂と自然のサイクルのなかで生業を営むとともに、来訪者に語り続ける神宮正芳氏である。またもう一人は、大学での生態学研究の職を辞して、対馬市島おこし協働隊の生物多様性保全担当として島に移り、定住の路を選んだ川口氏である。

立教大学が所在している首都圏で生活していると、組織で求められる一面だけで評価される自分がある。しかし、対馬を訪ねると、自然と社会と教育とを総合させる生き方があることに気づかされた。対馬調査ではその日の行動が終わった後、大学と地域とをつなげるにはどうすればいいか、阿部氏を囲み前田氏も交えて語り合った。地域創成研究センターを立ち上げて、ネットで教員と地元とを繋ぐ。地域市民研究員を育成し、カリキュラム編成に参画させてはどうだろうか。教養を高めるのではなく、地域づくりに参画させ、創業を目的とする教育を行ってみたい。地域おこし協力隊員を自治体からセンターに派遣してもらい、大学と協力隊員を採用した自治体とを往復して成果を地方に還元するなどなど。グローバルな人間像の具体化に向けて、ESD研究所は今後も飛躍を目指していきたい。



上田 信（うえだ・まこと）立教大学文学部教授。